

建設会社の新たな取組み

# インフラの町医者

## 地域建設業の複業化・農商工連携による6次化

当社は5年前までは松山城の名前にあやかった金亀建設という社名であり、舗装工事中心の地方建設会社であった。設立50年を期に愛亀に社名変更し、同時に建設という文字も取り払った。それはけつして建設業をやめるということではなく、建設業もできる事業会社へ脱皮したいという決意からだった。公共事業激減の中、地域建設会社のDNAを持つ者として、雇用や地域とのつながりを無視するような単純な縮小均衡には経営の舵を切りたくはなかった。

そもそも地方の舗装専門会社だから、技術技能職員の質と量が強みだが、それは安定的な公共事業発注下の場合であり、いったん発注が減少に向かい始めるとその強

みが一転して重荷や弱みになる。だからその強みの温存と雇用の安定のため2000年に農業生産法人あぐりを設立し、真摯に技術を磨いてきた技能職員の3分の1程度を受注の少ない閑期の年度上半期に、地域の農家から受託した圃場50haの稲作に振り向けた。無農薬無化学肥料、精密農業、食品残渣堆肥化有機リサイクル等の新しい取組みも盛り込んだのキックオフだった。持続可能な最低限の利益はあるとは言え、建設事業の売り上げ利益を補うというには程遠いが、雇用の安定、技能の温存は四苦八苦しながらもなんとか達成している。

現在当社グループはさまざまな理由で集まってきた会社や新たに

立ち上げた事業部等9社13事業部で構成されている。道路、管路、アスコ、建材、造園、生コン、砕石、熱絶縁、住宅リフォーム、農業等であるが、多角化副業化というよりは建設関連事業における団体戦の連携化、複業化を目指し、それぞれの社や社員が個の能力を向上させ、そして連携すれば身近で多様な地域内インフラの整備には貢献できるとの思いで『インフラの町医者』という言葉掲げサッカー型の経営を目指している(図1)。総合病院ではなく、町医者を目指すからには地域内で信用をいただかな

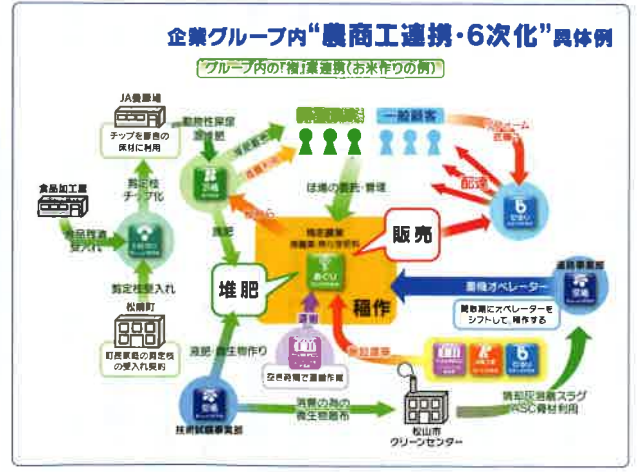


図1 グループ内複業化・農商工連携の具体例(6次化については注2参照)

ければ認めてもらえない。エンジニアというよりもテクニシヤンの要素が強いかもしれない。経済原則至上主義だけでは納得してもらえない。インフラの町医者としてここにいるだけで安心してもらえるような町医者を目指したいのである。

(注1)野球型経営とサッカー型経営・社長監督がすべてに(一球ごと)指示を出す計画と、サッカー型経営では、経営者の理念や戦略の下、いざゲームが始まればフィールド内の管理者層のリーダーシップで自社の判断や組み立てを行い、全員でネットワークを構築、そして変化させながら進める。

(注2)農業の1次産業、建設業の2次産業、サービス業の3次産業が連携する造語。足し算ではなく、掛け算としての6次産業化。